

巻 頭 言

環境バイオテクノロジー学会会長

矢 木 修 身

このたび平成13年12月に環境バイオテクノロジー学会誌の創刊号が発刊される運びとなりました。発刊に際しましては、遠藤銀朗編集委員長を中心として本年5月に編集準備委員会が、また11月には第1回の編集委員会が開催され、全国各地からの編集委員の先生方のご尽力により発刊することが出来ました。関係方々に厚く御礼申し上げます。

環境バイオテクノロジー学会は1995年京都大学工学部今中忠行初代会長のもとで研究会が設立され、昨年7月には第5回国際環境バイオテクノロジーシンポジウムを京都国際会館で開催し成功裏に終えることが出来、国内外において環境バイオテクノロジー研究会の高いアクティビティを認識してもらいました。このパワーをさらに発展させるべく、学会への名称変更と学会誌の発刊となりました。

現在、最も力を入れるべき分野として健康、IT、環境と言うキーワードが常に出てきます。人間の生存そのものが環境へ負の財産を生み出し、このままでは100年、200年先のわれわれの子孫は健全な生活が送れないのではないかと懸念されています。21世紀は環境の世紀だと言われるのは過言ではありません。

20世紀の末から、組換えDNA技術が広く活用されるようになり、バイオテクノロジーは加速度的に進展しました。ヒト遺伝子の解読、クローン動物の開発、クローン人間もしばしば話題に上がります。ひょとしたらもう作られているかもしれません。また環境浄化のための多くの非組換え及び組換え微生物、植物の開発がなされ、米国では原位置でのバイオによる浄化が積極的に進められております。有害物質分解菌の創生、生ごみを与えると140°Cまで温度上昇させる超高熱菌の出現、さらにはスーパーピッグ、スーパーマウス、スーパーアユなど動物を巨大化させることも可能となりました。21世紀は、バイオレメディエーション、バイオモニタリング、バイオペリペンションを通してより高い質の環境を作ることが目標となり、実際にそのような技術の開発が可能となるでしょう。しかしながら、新しい技術の確立には社会的受容を得るための努力が必要です。それにはリスクコミュニケーションが重要になります。環境バイオテクノロジー学会誌は、会員の方々の雑誌です。最先端の研究情報源として、また研究成果の発表の場として、さらに会員の方々の情報・意見交換の場として役立つ雑誌になることを願っております。

最後にお願いがございます。出版に際しては、相当の費用と労力を要します。なにとぞ、会員皆様方のご理解とご協力ならびに関連企業の人的・資金的援助をいただきたく心よりお願い申し上げます。

(東京大学大学院工学系研究科附属水環境制御研究センター・教授)